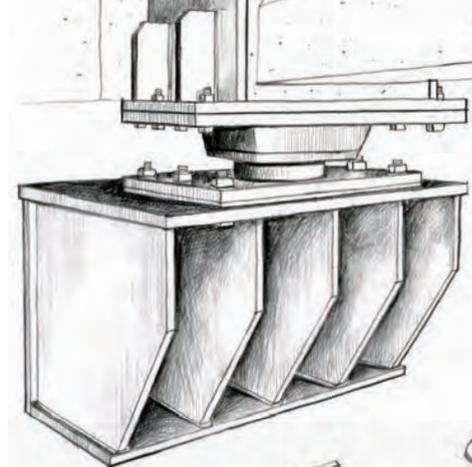
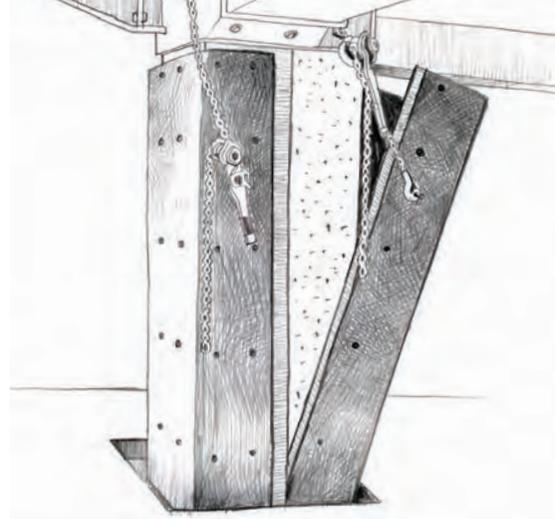
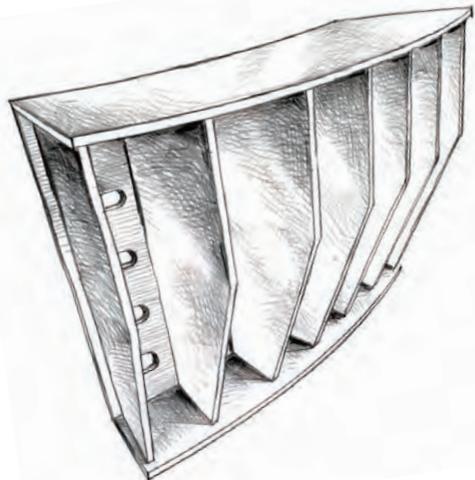
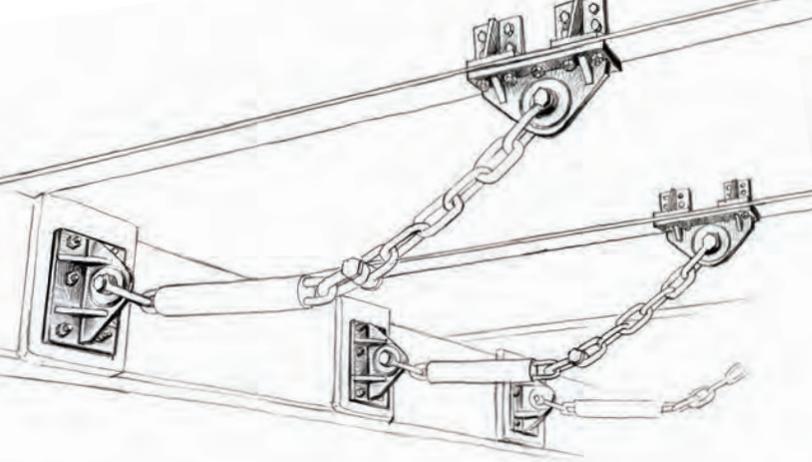


つなぐ、 未来へ。

Bridge to the Future



ニチデンワーク株式会社
NICHIDENWORK CO.,LTD.



橋梁を支える鉄工所。

主力は橋梁部品製造。
日本の、世界のインフラを支え続ける会社です。

ニチデンワークは、橋梁部品の製造を主力事業とした鉄工所です。

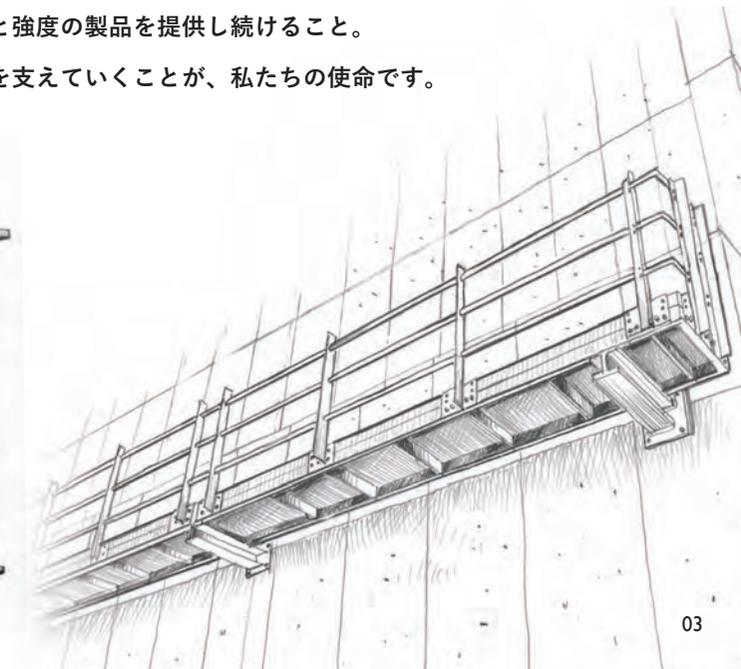
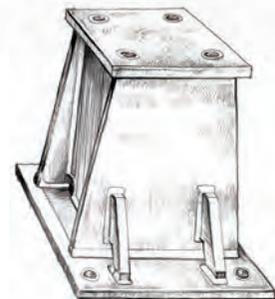
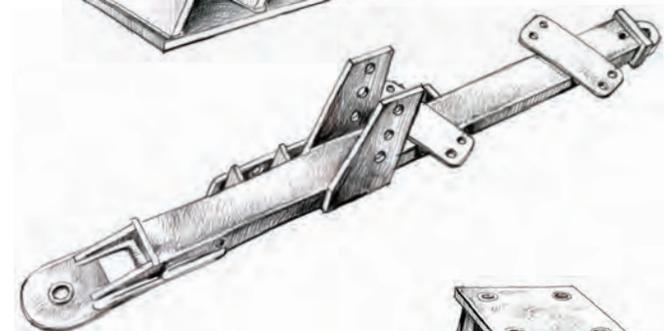
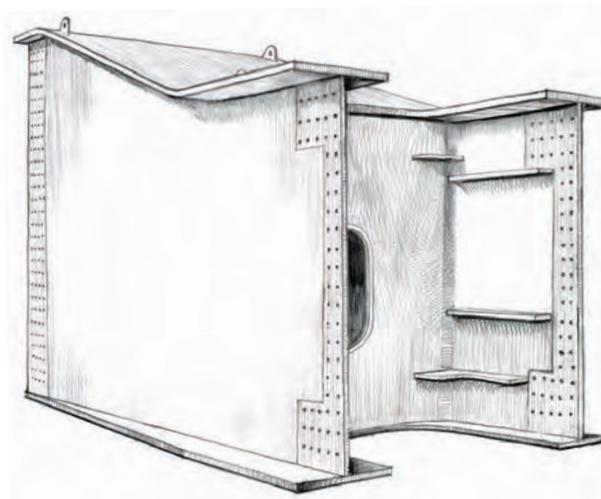
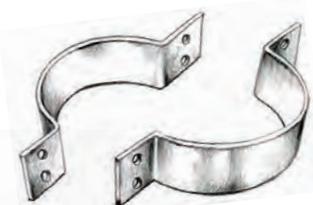
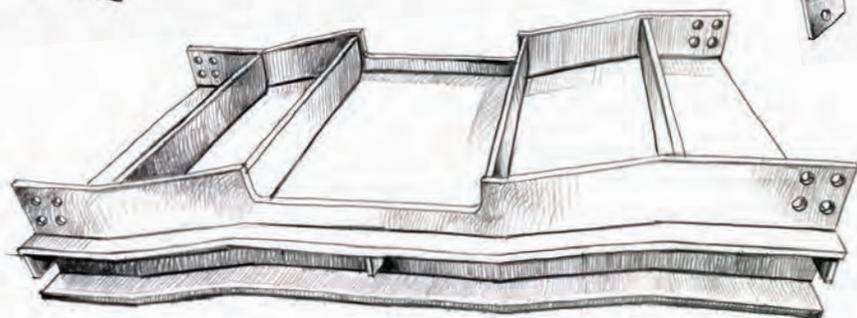
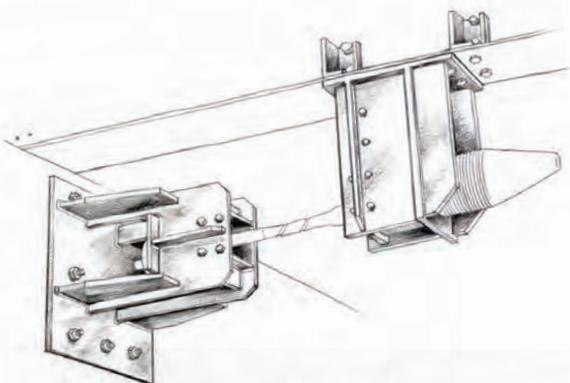
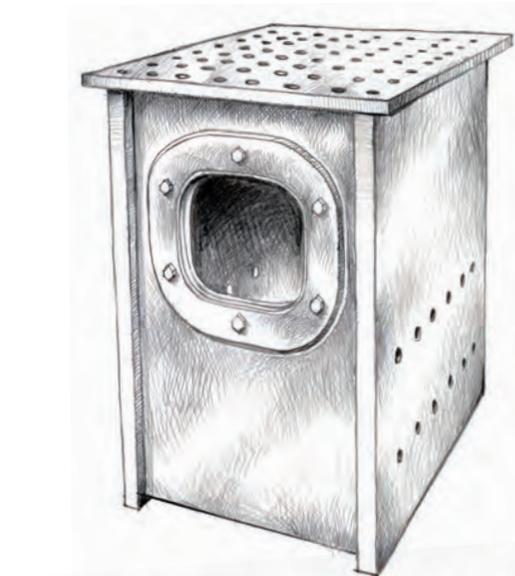
私たちが携わっているのは、巨大な橋梁全体から見ると小さな部品ではありますが、橋梁の耐震や安全性の強化に寄与する、重要な役割を果たしていると自負しています。

地震大国・日本のインフラは、急速に老朽化が進んでおり、橋梁の耐震補強や補修の重要性がさらに高まっています。

そこに対し、ニチデンワークが昭和49年の創業以来、たゆまぬ努力で積み重ねてきた高い製造技術と「鉄の専門家」としての知見が生かしているのを実感しています。

「産業活動を通し 全体人間を育成すると共に 社会の安寧に寄与する」という経営理念の下、これらの技術力を最大限に生かし、高い精度と強度の製品を提供し続けること。

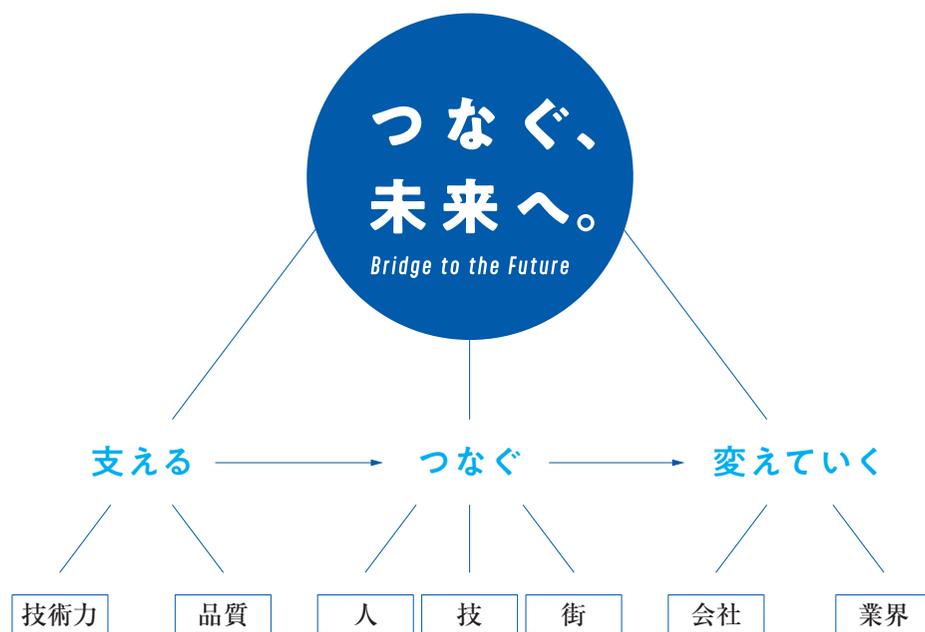
そして、お客様と共に橋梁を守り、インフラを支えていくことが、私たちの使命です。



橋を支え、その街で暮らす人々の
交通を支える。
私たちが製造しているのは
橋梁の一部ではありませんが
その部品が日本のインフラを
支えていると自負しています。

”支える”

Conceptual Diagram



「技術力」で支える。

ミスなく、丁寧に、正確に。

“当たり前”を実現する、高い技術

案件ごとに形状が違い、複雑な構造のものが多い橋梁部品。

それらを正確に造り上げるのは、当たり前のようでは難易度が高いもの。

ニチデンワークは、そのために必要な複雑な図面を正確に読み取る力や、

精度の高い組立と溶接の技術、

公共性の高い工事だからこそ求められる、

定められた手続きに則った業務の進行や品質管理、

厳しい検査へ対応する力とそのノウハウを兼ね備えています。

より良い製品にするために、時には形状や強度に関して提案することも。

日本の橋梁を支える一員として、常に全力を尽くしています。



原寸係は、お客様からいただく詳細設計図（承認図）から部材マーク図や原寸リストを描き出します。その際、正しい製品を造るため、常に「提供された図面も完璧ではない」との目線で読み込みます。事前にミスを見つけ出すことも自分たちの大切な役割の一つと考えています。



溶接の見た目が美しい。これは溶接技術の高さを表す一つの指標です。もちろん美しいだけでなく、欠陥のない、強度が確かな溶接を日々実践しています。



鉄の専門家を自負しているからこそ、組立時に発生する歪みの管理はお手のもの。鉄の特性をしっかりと理解し、ものづくりに活かしています。

図面の溶接指示等を正確に読み取って作業に臨みます。



“支える”

「品質」で支える。

「ミスゼロ」への情熱を 全社員が胸に抱いています

どれほど気を付けていても、物事に“絶対”はありません。

だからこそ私たちは、各部署が連携してありとあらゆる角度から

ミスの原因になりそうなことを徹底的にチェックし、

その可能性を無くすべく常に努力しています。

そうすることで、万が一ミスが起きても納品前に発見し、

正しい製品を確実にお届けする。それがニチデンワークの矜持です。

「職人であれ！」を合い言葉に、今日もミスゼロを更新し続けています。

お客様への受け渡し検査の前に、品質管理課による検査と第三者機関によるUT検査を社内検査として実施。この社内検査の時点でほぼミスが見つからないのがニチデンワーク品質です。



当たり前を確実に。思い込みによるミスを防ぐため、塗装等の不明な仕様は、しっかりと確認しています。また図面を読み込んだうえで、疑問があればすぐに確認をとり、より良い製品にするための改善案も提案しています。



熟練の職人によって、鉄の熱収縮の影響をも計算に入れて造られる製品は、正確に規定寸法で仕上がっていることがほとんど。それでも品質に万全を期すために厳しく検査を行っています。

”
支える
“

工務系の日常

プロジェクト進行を支える苦悩と喜び

件名が「受注情報：」からはじまる、そのメールは営業を担う社長からの新しい業務の受注を知らせるもので、物件概要や図面等の情報が添えられた定型のメールだ。誰に担当してほしいといった指示もなければ、「獲れたぞ!」という感想もめったにないのは、わが社の社長らしいところだと思う。

私たち工務係は、積算のために見積段階から関わっていることも多いので、件名を見て「あっ、あの仕事受注できたんだ」と嬉しく思いはするが、それは束の間。「工期に間に合わせられるかな」とか、「担当は誰がいいかな」とか、不安な気持ちの方が大きくなる。

工務係の仕事は、原寸係や製造課、品質管理課の作業工程を上手に管理することに尽きると言っていると思う。そのためには、社内だけではなく必要な鋼材等の材料や加工の発注をしたり、完成品の検査や塗装を発注したりと、多くの関係者のスケジュールを調整する必要がある。常に予定通りとはいかないので、納品されるまでに何度も調整が必要になったり、追加作業が発生したりして、お客様と納期について相談させていただくなど、心苦しいこともある。苦しいこともあるのだが、工程を調整するのは、パズルを解いていく感覚にも近く、うまく調整ができると、ちょっと爽快な気持ちになれる。

さて、仕事の工期は3か月くらいで終わるものもあれば、1年以上継続するものなど、さまざまである。長期にわたる仕事では、その始まりに各部署の代表や工場長、時には社長も一緒に「現場打ち合わせ」に出かけることが多く、このたまの出張が実は楽しみだ。お客様との顔合わせとともに、これから自分たちが造



る製品が使われる橋を実際に見る機会でもあり、「やる気のスイッチ」が入る気がするのだ。

その後、仕様や図面上の疑問点を解消し、原寸係が原寸リストを作成、それを基に私たちが材料を発注。材料が工場に届く目処がたったところで、「着工前会議」にメンバーを招集する、というのが通常の流れである。工務係は受注の初期段階から納品まで関わるのだけれど、この会議の開催をもって気持ち的には仕事の半分以上が完了したという達成感がある。さまざまな注意事項を記載した「作業指示書」をリレーのボタンを渡す感覚で、わが社の頼れる製造課・品質管理課に引き渡す。任せたぞ、という気持ちに乗せて。

ちなみに、業務の進捗は、表計算ソフトで管理していて、完了した工程の箇所を黄色に着色している。全部黄色になったら、その業務が完了するというわけだ。ずらっと並ぶ業務を予定通りに黄色に染めていくのは本当に気持ちがいい。

”
つなぐ
“

街と街を。
人と人を。
技術を未来へ。
ニチデンワークは次世代に向けて
さまざまなものをつないでいきます。



「人」
をつなぐ。



それぞれの業務ごとに開く「着工前会議」は、工務課から製造課へつなぐ、引き継ぎの場。万端に整えた作業指示書や図面を基に、注意点等を共有します。ただ部品を造るのではなく「この橋梁のための部品」を造るのだという気持ちも共有します。

プロジェクトの始まりには、お客様と現地打ち合わせを行うことも。



社員同士、課同士
声を掛け合い、業務を進める

「お客様第一主義に徹し、お客様に正しい製品を提供する」

私たちは、この言葉を胸に日々働いています。

いただいた設計図を基に部品の詳細図面を描き、材料を発注する工務課。

正確に組み立て、高度な技術で溶接する製造課。

ミスなく、正しい製品になっているかを厳しく検査する品質管理課。

各課が自律しつつ、密にコミュニケーションを取りながら業務を進めるため、

全体指揮を執る人はいなくとも、速やかに、正確に遂行されています。

互いへの信頼と協力体制が、「正しい製品の提供」を実現しているのです。



部材マーク図を基に、工務課から製造担当に相談をすることもあれば、その逆も。課は違えど、互いにミスなく正しい製品を造るために尽力しています。

「技」をつなぐ。

社内に、世界に 正しい技術を伝えていく

ニチデンワークの要は、組立と溶接の技術。

ミスなく、精度の高い製品を造るためには、正しい技術の継承が必須です。

そのためにわかりやすい溶接マニュアル（仕様書）を作成し、それに沿った作業を徹底。

誰もが精度の高い溶接を行えるようにすることで、

品質の良い製品を提供できる環境をつくり出しています。

また、ベトナムなどから、海外実習生の受け入れも多数実施。

「職人であれ！」というマインドとともに、

橋梁部品の製造技術を指導しています。

日本から世界へ。確かな技術をつないでいます。

新人でもベテランでも、自己流ではなく仕様書に沿うように徹底することで、溶接技術が劇的に向上。現在では、社内の品質検査での溶接欠陥率1%以下を実現しています。



”つなぐ“



海外調達比率が上がっている現在、海外との見えない競争も意識する必要を感じています。社員の国際性を育むべく始めたベトナムからの実習生の受け入れは2024年までにのべ9人。「自国に帰ったあかつきには、ニチデンワークで学んだ技術で活躍してほしい」。そんな気持ちで日々技術指導を行っています。



実際の業務に近い技術課題で、社内溶接・組立大会を定期的に行なう。社員のモチベーション向上を図ることで、生産力と品質の向上に結びつける工夫をしています。



「街」をつなぐ。

橋梁は、街と街をつなぐ重要なルート。まさに“架け橋”です。
九州のみならず全国の橋梁に、ニチデンワークの製造した部品は使われています。

香川県 南備讃瀬戸大橋他耐震補強工事

施工期間 ● 2017/9～2019/9 工事概要 ● 耐震工事
製造品目 ● 支承補強・桁補強・対傾構・検査路・落橋防止ブラケット



道路・鉄道併用橋である「瀬戸大橋」の耐震性向上を図るため、吊橋、斜張橋、トラス橋及び高架橋の耐震補強工事を実施。2年間にわたり下津井瀬戸大橋、南備讃瀬戸大橋、北備讃瀬戸大橋、番の州高架橋、岩黒島橋、櫃石島橋6橋の支承補強・支承補完・横構補強工事に必要な部材を製作、納入しました。



北海道 道東自動車道 新千歳川橋 耐震補強工事

施工期間 ● 2021/6～2024/6 工事概要 ● 耐震工事
製造品目 ● 横変位拘束構造・水平力分担構造・落橋防止構造



耐震性向上を図るため、道東自動車道の「新千歳川橋」他2橋の耐震補強工事を実施。約3年間にわたる工事において、弊社では、平岡橋、上長都橋、新千歳川橋へ横変位拘束構造・水平力分担構造・落橋防止構造等の耐震補強工事に必要な部材を製作、納入しました。



福岡県 令和4年度 行橋管内橋梁補修外工事

施工期間 ● 2023/4～2023/8 工事概要 ● 耐震工事
製造品目 ● 水平力分担構造・落橋防止構造



行橋市内にある道場寺橋は、地域の方々の生活に必要不可欠な橋。日々安全に利用していただくために、水平力分担構造・落橋防止構造等の耐震補強工事に必要な部材を製作、納入しました。



福岡県 関門自動車道 関門橋主ケーブル改良工事

施工期間 ● 2012/12～継続中 工事概要 ● 耐震工事
製造品目 ● 縦桁補強・検査路・支承取替・送気設備部材・ハンドロープ部材



1973（昭和48）年11月に開通した関門橋においては、約40年経過後から10年以上の長期にわたるリフレッシュ工事を実施中。弊社は当工事に継続的に携わっており、これまでに縦桁補強・検査路・支承取替のほか、主ケーブル送気設備の設置に必要な部材、バンドボルト・ハンドロープの交換のための部材を納入しました。



原寸作業の心得

原寸係の主な仕事は、お客様から提供いただいた承認図から、私たちが造るべき製品に必要な部材を抜き出し、図面（原寸リスト）にしていくこと。この原寸作業によって、製造に必要な部材の種類や数などの情報が出そろい、工務係が材料や加工を発注できるようになる。これは完成品のプラモデルを分解して、一つ一つの部品を図面化する作業をイメージしてもらえるといいかもしれない。

工場にこれらの材料が届けば、作業に取り掛かれる状態になる。原寸リストや部材マーク図には、組立や溶接にあたっての注意事項を記入するなどして、製造課のメンバーが作業しやすいような配慮をしており、必要があれば工場に出向いて、部材を前に打ち合わせをすることもある。

さて、実際の原寸作業にあたって、私たちは「間違いをしない人はいない」と思って取り組んでいる。お客様から提供される完璧に見える承認図にも、間違いが見つかることもあるはず、という気持ちで臨むのだ。実際、一つの業務のなかで確認が必要な箇所が全くないのは珍しいくらいで、気になる箇所が見つからないと、逆に不安になる。見つかった疑問点は、都度お客様に確認をさせていただくのだが、感謝されることが多いのでやりがいを感じる瞬間でもある。図面の修正のために工程が遅れることもあるけれど、誰もが間違ったモノを作りたくないのだ。

ところで、原寸係も人間であり、私たち自身も間違うことがあるのもまた事実。本当に思い出したくもないのだが、部材の数を間違えたり、使用材質の指定を間違えたりした苦い思い出を、原寸係のメンバーは大体持っている。原寸リストに間違いがあると、材料の再発注など無駄な作業が発生するし、工期にも影響するし、会社にも損害を与えるし、心にも傷がつく。散々である。

原寸リストができあがると、係のメンバーでチェックをするのだが、こうしたつらい経験がある仲間たちなので、お互いに「真剣に」確認し合っている。

ちなみに、原寸作業をしていると身に付く能力があって、複雑な図面でも、しばらく眺めていると3Dの立体像を目の前に浮かべることができるようになる。その像をぐるぐると回せるようになる。なので、原寸係が打ち合わせ中に上の空に見えるときは、頭のなかで立体像を回しながら図面チェックをしているのだ。



「間違いをしない人はいない」ことを念頭に
図面に向き合うことの大切さ

“変えていく”

技術の“確かさ”は
変わってはいけなけれど
変わるべきものもあります。
私たちが目指しているのは
働く人が笑顔で過ごせる、
持続可能な環境です。



「会社」

を変えていく。

働き甲斐も働きやすさも 両立できる職場環境を

「お客様の要望に応えるために」

その一心で、残業、残業の毎日だった時代もありました。

しかし、そんな労働環境では社員の幸せは守れない。

だから、志はそのままに働き方改革に乗り出しました。

会社と社員で視線を合わせて改革を進めることで

現在はほぼ残業ゼロ。休日も年間123日へ。

いち早くリモートワークできる環境を整備し、

男性社員も育児休暇が取れるよう体制も整えました。

誰にとっても働きやすい職場環境を目指し、

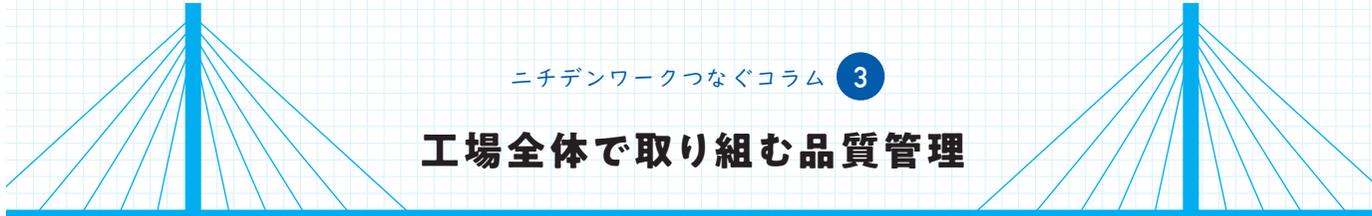
私たちは、これからも変わり続けます。



”変えていく“



休憩中は自然と集まって談笑。
残業がなくなることで笑顔が増えるだけでなく、
ミスが減り、品質が向上しています。



工場全体で取り組む品質管理

自信を持ってお客様に届けられる
製品に仕上げてくれる仲間たちに、
感謝しかありません！

皆さんは「品質管理」を行う部署に、どのような印象をお持ちだろうか？ もしかしたら、細々とした修正指示をするのが仕事だから、他部署から煙たがられたり、顧客からの不具合等の指摘に対応したりと、なかなかストレスのかかる大変な部署だろう、と思われるかもしれない。

しかし、そのイメージはわが社の品質管理課（略して「品管」）には全く当てはまらない。むしろ、工場一体となって、私たち品管の厳しい検査を一発パスしてやろう、という気概を感じるくらいだし、修正依頼にも前向きに対応しようというポジティブな空気に溢れていて、ギスギスした雰囲気は微塵もない。

品管が行う検査には、主に完成した製品についての寸法検査と外観検査がある。これは簡単にいえば、機

能と美観のチェックで、設計通りの誤差内に収まっているか、外観がキレイかどうか、ということを見る。また社内検査として第三者機関によるUT検査も行う。

わが社の自慢と言っていると思うのだが、私たち品管が検査する段階で、こと機能に関してのミスはほとんどない。なぜかといえば、製造工程のなかでのチェックにより、問題があれば修正してくれているから。これはすごいことだと思う（だから自慢なのだが）。塗装やメッキの仕上げなどの外観は、主観的な判断もあるので、修正をお願いすることがあるが、

「この仕上げ、お客様からすると、気になるはずで、指摘が入ると思う。もう少しきれいにしたい」「ああ、確かにそうですね、気付かずにすみません。やりましょう！」

という感じで、気持ちの良い返事しか聞いたことがない。

改めて、どうしていい感じなのか考えてみると、自分たちの造っているものが「あの橋」を支える重要なパーツになるのだから、手を抜くなどありえないという気持ちを共有できているのだと思う。お客様から見たらどうか、という視点を工場の皆が持ってくれているからだろうと思う。

こういう仲間たちが支えてくれるから、私たち品管は、自信を持ってお客様による最終の受け渡し検査に臨むことができている。

おかげで、我々も遠慮なく厳しく検査できるというものだ。



業界を
変えて
いく！
PRESIDENT'S VOICE

声を上げ続けること。
それが、業界を変える
第一歩だと信じています。

どこの業界も課題があると思いますが、鉄構業界も例外ではありません。自分たちの努力だけでは変えられない法や制度の壁、下請けであることに起因する問題。同業者で集まると、そんな話を耳にします。

業界の構造的な問題は、個人や一企業の努力のみでは解決しません。業界が丸となって法制度上の問題を明らかにし、より公正で適正な仕組みに改善するための所管省庁等への具体的なアクションが重要になります。私自身、微力ながらこうした活動に携わってきて、少しずつですが良い方向に変わっていることを嬉しく思っています。

課題や困難に感じていることは、解決に向けて声を上げなければ変わりません。私は節目節目でバブル崩壊やリーマンショックなどに直面し、それらを乗り越えてきた世代だからこそ、そう実感しています。

一方で、制度だけでなく、私たちも変わる必要があるとも思っています。私たちはいわゆる“下請け”ですが、“ものづくりのプロ”です。依頼されたものを最適な形で提供できなければなりません。プロとして、技術と知見をお客様に提供し続けることが、価格や関係性などに反映されていくと信じています。

プロとしてすべきことをして、声を上げるべきことは上げ続ける。そうして、業界全体をより良く変えて次世代につないでいきたいと思っています。みんなで明るい未来を目指していきましょう。

ニチデンワーク株式会社 | 秋山 直樹
AKIYAMA Naoki

つなぐ、 未来へ。

Bridge to the Future

地震大国、日本。2024年1月に起きた能登地震の被害は、改めてライフラインの大切さを実感させられるものでした。私たちが製造している橋梁部品は、命を守り、流通や交通を滞らせないという使命を担っているのです。その使命を果たすためには、当たり前の品質の製品を、ミスなく、正確に造り続けなければなりません。そのためにも、ものづくりのプロとして、お客様が言葉にしていないニーズをキャッチして、寄り添った提案をしなければならないと思っています。例えば、納期に応えつつも、製造に必要な時間を確保できるスケジュールを提示する。製品に求められる役割と強度を踏まえて、よりシンプルできれいな形状を提案する。そのことがインフラを守ることに直結しているはずですし、そういった提案を通して、お客様から頼りにしていただける会社として成長し続けることが、私たちの誇りにもつながると信じています。これからもインフラを支え、社会を支えていく。そして、ニチデンワークで働くことに幸せを感じられる会社であり続けるために。これからも私たちは日々技術を磨き、知見を深めていきます。



会社概要

役員	代表取締役 秋山 直樹 取締役 秋山 貞子
創業	昭和49年 9月 1日
会社設立	平成元年 8月 1日
資本金	23,656,500円
工場	福岡県北九州市若松区響町 1丁目28番 3号 敷地面積：2,960㎡ 建築延面積：1,920㎡
倉庫	福岡県北九州市若松区 建築延面積：434㎡
営業種目	落橋防止ブラケット・橋梁付属物（検査路等）・橋梁仮設備（工事桁等）・ 土木資材（鋼製品）・建築鉄骨・建築金物（鉄骨階段等）・建築資材（鋼製品）・各種溶接
従業員数	30名
加工能力（年産）	2,400t
取引銀行	福岡ひびき信用金庫若松支店 西日本シティ銀行若松支店
許認可・指定等	品質マネジメントシステム国際規格ISO9001認証取得 国土交通大臣認定鉄骨加工工場Mグレード認定番号TFBM-110366 福岡県知事許可（般-1）第104608号

沿革

- 1974** 昭和49年9月 • 秋山政彦が個人事業にて発足。溶接業を主体に鋼構造物工事業に携わる
- 1989** 平成元年8月 • 資本金5,000,000円にてニチデンワーク有限会社を設立、機械器具設置工事業等にも事業を拡大する
- 1999** 平成11年9月 • 若松区北浜に工場を構える
- 2007** 平成19年5月 • 若松区響町に新工場を建設し移転、株式会社に組織を変更し「ニチデンワーク株式会社」を設立。代表取締役に秋山 政彦、専務取締役に秋山直樹が就任。橋梁の製作を手掛けるように
- 2009** 平成21年1月 • 代表取締役に秋山直樹、取締役に秋山貞子が就任
- 2010** 平成22年6月 • 資本金を15,000,000円に増資
- 2011** 平成23年8月 • 国土交通大臣認定鉄骨加工工場Mグレード取得
- 2017** 平成29年7月 • ISO9001 (QMS)を取得
- 2023** 令和5年3月 6月 • 若松区の事務所棟を新築、溶接棟を新築
• 資本金を23,656,500円に増資

ロゴマーク誕生秘話

社員みんなで作り上げた シンボルマーク

ニチデンワークのロゴマークは、2020年、私たちが橋梁の仕事に特化することを決めたのを機に改定しました。デザインは、「つなぐ」「つながる」をキーワードに社員から公募。素人ながらにみんなが一生懸命考えたアイデア全18点から、社長の秋山が選定しました。この新しいロゴは、橋梁をイメージしたもの。ニチデンワークの「N」と「W」を橋脚として、橋をかけているビジュアルをロゴデザイン化しました。橋梁のニチデンワーク。NipponとWorldをつなぐ企業を目指す。そんな想いが込められています。





ニチデンワーク株式会社
NICHIDENWORK CO.,LTD.

〒808-0021

福岡県北九州市若松区響町1丁目28番3号

Tel. 093-752-2720

<https://ndw.co.jp/>

